東洋学報　第九十五巻第三号　平成二十五年十二月

論説

王莽政権支持者の検討
――平帝期における王莽と諸生の関係を中心として――

飯田祥子

はじめに

紀元後八年、孺子嬰が王莽に禅譲し、前漢王朝は滅亡する。劉氏漢朝から王氏新朝への易姓革命である。次の後漢王朝は新を打倒し、前漢を復興した立場にあるため、後漢以来、王莽は簒奪者とされ、新王朝は正統性をみとめられない。

しかし前漢後期から王莽新をへて後漢にいたる時代、儒家理念にもとづき連続性のある改革がおこなわれていた。近年、このことの重要性に注目があつまっている。(1)「簒奪者王莽」の図式を相対化し、王莽礼制改革の中国史における意義を評価する。

ただし礼制などの理念に直結した改革をのぞけば、今なお『漢書』の提示する枠組みに基づき、王莽の政策は評価され続けているように思われる。王莽の諸政策は非現実的で無意味であったという見方は根強い。たとえば河地重造は王莽の社会改革について「かれはかれなりに社会を見、改革を志した」ものの「かれの脳裏をとおって出てくるとき、その方法は現実性を失い、観念と形式にはめこまれた」という。(2)

王莽の政策の意義を高く評価する論者も存在するが、(3)王莽個人の思想や政策意図を重視するようである。先駆性を評価する点からみても、同時代における政策の意義や同時代人からの評価を議論するわけではない。

新王朝が短期間のうちに崩壊したことからも、王莽の政策の多くが有意義な結果を残せなかったのは事実である。しかし、河地の指摘の通り、王莽当人の意図においては、既存の政権には解決できない問題に対して、有意義な政策をおこなっていたのであろう。また政権の交代には新政権を支持する集団が不可欠であろう。王莽政権についても、同時代人に評価される政策をおこない、支持者を獲得したと考えるのが自然である。

前漢末期の人々は、なにゆえに王莽を支持したのか。支持者にはどのような背景があり、王莽政権は彼らをなぜ引きつけたのか。同時代人との関係から王莽政権を理解したい。

なお本稿は王莽政権確立過程における支持者に注目するため、禅譲以前の時期、特に平帝元始年間を検討の中心とし、前後する時期の現象を分析の手がかりとする。居摂以降については別稿で議論する。(4)

一　王莽の官製民衆運動

『漢書』王莽伝には、平帝元始年間〔後一～五年〕を中心に、人々が王莽を賞賛する上書をおこなった、あるいは王莽の行動にならったという記事が散見される。宮川尚志はこれを「官製の民衆運動の芝居」という。[5]「官製」であれ、「芝居」であれ、王莽支持のパフォーマンスが繰り広げられたことは注目に値する。個別に事例を概観しておこう。

①〔元始二年〕私財の提供

王莽が貧民救済のために私財の提供を申し出ると、公卿がそれにならったという。

莽上書に因りて、錢百萬を出し、田三十頃を獻じ、大司農に付して貧民に給するを助くを願う。是に於いて公卿皆な慕效す。[6]（王莽伝上）

『漢書』平帝紀元始二〔後二〕年の記事がこれに相当するだろう。

郡國大いに旱し、蝗ありて、青州尤も甚だしく、民流亡す。安漢公・四輔・三公・卿大夫・吏民の百姓の困乏せるが爲に其の田宅を獻ずる者二百三十人、口を以て貧民に賦つ。[7]（平帝紀）

高級官僚から吏民までの計二三〇人が関わった。多くのものが王莽の道徳的なふるまいをみならったとされる。[8]

②〔元始二年〕皇后候補辞退[9]

平帝皇后の冊立が議論された際のことである。皇后候補として他の王氏の女性が自分の娘の競争相手となるのをさけるため、[10]王莽は元后に働きかけ「王氏の女は、朕の外家なり。其れ采る勿れ」[11]という詔をださせる。それに対して次のような動きがあった。

庶民・諸生・郎吏以上の守闕上書する者日ごとに千餘人、公卿大夫或は廷中に詣し、或は省の戶下に伏し、咸な言く「明詔の聖德は巍巍たること彼の如く、安漢公の盛勲は堂堂たること此の若し。今當に后を立つべくして、獨り奈何ぞ公女を廢さんや。天下安くにか歸命する所ならん。願わくは公女を得て天下の母と爲さん」と。

莽長史以下を遣り部に分かち公卿及び諸生を曉止するも、上書する者愈いよ甚だし。(12)（王莽伝上）

王莽の娘こそ皇后にふさわしいと主張するものが一日につき一、〇〇〇人以上あった。王莽は自分の属吏に彼らをなだめさせたが、上書はなおさかんにおこなわれた。

③〔元始四年〕「宰衡」称号

元始三年、大司徒司直陳崇が上奏をおこない、王莽の功績をほめたたえ、周公に相当する待遇をあたえよとのべていた。(13) 呂寛事件のため、この件は停止していたが、元始四年、太保王舜等がむしかえし、八、〇〇〇人以上の民が同調する上書をおこなった。

及び民の上書する者八千餘人、咸な曰く「伊尹は阿衡と爲り、周公は太宰と爲り、周公は七子の封を享け、上公の賞を過ぐ有り。宜しく陳崇の言の如くすべし」と。(14)（王莽伝上）

この後、辞退云々のやりとりをかわしたあげく、王莽は「宰衡」の称号をうけた。

④〔元始四年〕明堂辟雍建設

王莽の明堂辟雍建設の功績を群臣がたたえた上奏には以下のようにみえる。

公八月戴生魄庚子を以て朝を奉使し、書を用て營築を臨賦し、越若に翊辛丑、諸生・庶民大いに和會し、十萬

の衆竝びに集い、平作すること二旬、大功畢成す。[15]（王莽伝上）

王莽が建設を指示すると、工事に「諸生・庶民」が一〇〇、〇〇〇人もつどい、二〇日間で工事をおえたという。

⑤〔元始五年〕封地辞退

王莽が新野の封地を辞退すると、これを不当とする上書があいつぎ、これをきっかけに王莽に九錫の礼がくわえられる。

是の時、吏民の莽の新野の田を受けざるを以て上書する者、前後四十八萬七千五百七十二人。及び諸侯王・公・列侯・宗室の見者、皆な叩頭して宜しく亟ぎ賞を安漢公に加うべきを言う。[16]（王莽伝上）

明堂での儀礼に参加していた諸侯王から宗室までと、吏民四八七、五七二人が上書をおこない、王莽の功績にふさわしい賞をあたえよと主張をする。おなじ状況をのべた元后の詔には「是を以て諸侯王・公・列侯・宗室・諸生・吏民翕然として辭を同じくして、闕庭に連守す[17]」とある。

⑥〔地皇四年〕「哭」

すでに反王莽の軍が各地で蜂起し、関中付近までせまるものもあった。このとき王莽は「哭」して混乱を鎮めようとする。

因りて心を搏ちて大いに哭し、氣盡き、伏して叩頭す。又た告天の策を作り、自ら功勞を陳べること千餘言。諸生・小民は旦夕に會し哭し、爲に飧粥を設け、甚だ悲哀す及び能く策文を誦するは除して以て郎と爲し、五千餘人に至る。[18]（王莽伝下）

王莽が群臣をひきつれて「哭」すると、「諸生・小民」もつどい「哭」した。うち郎に取り立てられた者だけで五、〇〇〇人以上にのぼるという。

以上のように、王莽伝には多くの人々が王莽の行動にならい、王莽をほめたたえたとする記事がみえる。行動自体はそれぞれだが、王莽支持を表明するパフォーマンスである。参加者は①⑤「吏民」、②④「庶民」、③「民」、⑥「小民」などをふくみ、宮川のいうように「民衆運動」とよべよう。

王莽は「色は厲にして言は方なるも、爲す所有らんと欲すれば、微に風采を見（あらわ）す。黨與はその指意を承けて之を顯奏し、莽は稽首涕泣して、固く推讓し、上は以て太后を惑わし、下は用て信を衆庶に示[19]」（王莽伝上）したと『漢書』はいう。王莽は「党与」をつかって仕込んだ上で、謙讓を演じて見せた。「民衆運動」も宮川のいうように「官製」、すなわち王莽側で仕込んだ上でのパフォーマンスであろう。

しかし、だからといって民が一方的・強制的に動員されたとは考えがたい。東晋次は「王莽の腹心による世論操作や働きかけがあっただろうが、正当な方法で政治改革や恤民政策を実行していた王莽に対する人々の評価が相当に高いものであったことも否定できないのではなかろうか[20]」とみる。班固すら「其の位に居りて輔政するに及び、成・哀の際は國家に勤勞し、直道して行い、動（つね）に稱述せらる[21]」（王莽伝賛）と王莽が執政者として高い評価を得ていたことを認めている。大司馬就任中の王莽は「衆庶」の「望」の担い手であり[22]、哀帝期の失脚を不当とみなす者はおり[23]、賢良の声により王莽は中央に復帰する[24]。哀帝崩御後、大司馬に返り咲いたのも、「衆庶」の支持が後押しをした[25]。もともと「望」があるからこそ「世論操作や働きかけ」は成果が得られる。

また王莽は人々の利害関心を利用し、自身の政治的な立場を強化することに役立てた。たとえば「附順する者は拔擢し、忤恨する者は誅滅」[26]（王莽伝上）し、「上は宗廟を尊び、禮樂を增加し、下は士民鰥寡に惠み、恩澤の政は施さざる所なし」[27]（同）、「莽既に衆庶を説ばし、又た專斷を欲」[28]（同）したとされる。人気取りの努力の結果として、元始年間には高い評価を勝ち取っていたと考えられる。

つまり「民衆運動」の背景には、王莽と「民衆」とのあいだの利害の一致があるのであろう。「民衆」は王莽がこれまであたえた恩恵に応えるため、また王莽が執政者でありつづけ、今後も指導力を発揮し、恩恵をほどこす政策を継続することを期待するために、王莽支持の行動をとったと考えられる。王莽が自分の政治的地位のために、「民衆運動」を利用したのは事実だが、「民衆」にとっても王莽という執政者には利用価値があったのであろう。

このような点で「民衆運動」は、同時代人にとっての王莽政権を知るための重要な手がかりを与えてくれるだろう。王莽の政策は王莽支持者の利害と密接な関係をもつのである。

ただ残念ながら、これらの史料に登場する「衆庶」がどのような人々であるのか、特定することは困難であり、具体的に王莽とどのように関わったのかはあきらかにしがたい。

次節以下では「諸生」を取り上げて検討してゆきたい。上述の「民衆運動」では①③をのぞき四件に「諸生」が参加したと表記されている。②では王莽が長史になだめさせた対象として、特に「公卿」とともに「諸生」があげられる。「諸生」は「民衆運動」の参加者のなかで目立つ存在であり、王莽支持者のうち重要な部分をしめていた可能性がある。「諸生」については比較的史料や研究が豊富であり、かれらをとりまく状況を検討することもでき

よう。

二　王莽と諸生

東晋次[29]によれば「諸生」は「修学中の学生を意味する語」であり、「太学に学ぶ博士弟子・太学生、郡国学に籍を置く文学弟子・郡学生・諸郡生徒、私学の弟子・門生・門徒・門人などすべてを包含する語である」。

前節でみた「民衆運動」はすべて首都長安を舞台とする。参加した「諸生」は長安の太学を中心に[30]、私学の学生を含むと考えられる[31]。

前漢末の太学の学生について、西川利文が検討をおこなっている[32]。この時期太学は「本来の官吏養成機関としての機能を失い、人脈形成の場になっていく」。元帝期、太学の博士弟子の定員は急増したにもかかわらず、卒業後の任用ポストが十分用意されていないためであった。このため博士弟子たちは「官僚を核とした政治集団の如きものをつくり出」していた。

そのような風潮は哀帝元寿年間〔前二～一年〕[33]の司隷鮑宣にまつわる事件にみられる。この事件は諸生の政治活動の嚆矢として注目される。くわしくみておこう。

鮑宣は「好学明経」として哀帝にも「名儒」と認められた人物である。司隷在任時、属吏を使い、丞相孔光の一行に無礼を働いた。

宣は使者を距閉し人臣の禮を亡するに坐し、大不敬不道、廷尉の獄に下る。博士弟子濟南王咸は幡を太學の下

に擧げて曰く「鮑司隷を救わんと欲する者は此の下に會せ」と。諸生の會する者千餘人。朝日、丞相孔光を遮りて自言し、丞相の車は行くを得ず、又た守闕上書す。上は遂に宣に罪を抵てるに減死一等、髡鉗とす。[34]（『漢書』鮑宣伝）

鮑宣は実行犯である属吏を差し出すのを拒み、大不敬の罪に問われた。すると鮑宣を救うため諸生が動いた。博士弟子の号令によって、諸生一、〇〇〇名あまりがつどい、人数をたのみに丞相の参内をはばみ、自分たちの主張を「守闕上書」した。結果鮑宣は死罪をまぬがれた。さながら後漢の洛陽太学のようである。[35]前漢末期、太学等の諸生は政治的な意味をもつ存在となっている。

王莽を賛美した諸生は、鮑宣事件と同じ政治活動に積極的な風潮のもとにあると考えられる。前節事例②において、諸生が王莽の娘を皇后にと「守闕上書」したのは元始二〔後二〕年のことである。鮑宣事件から三年ほどのちにすぎない。

王莽はこの風潮を意識して「政治集団の如きもの」の核たろうとしていたと考えられる。

王莽は兄王永の遺児王光の師や同学に大盤振る舞いをしてみせた。

（王永）子の光ありて、莽は博士の門下に學ばしむ。莽は休沐に出でるに、車騎を振え、羊酒を奉じ、其の師に勞遣し、恩施は下は同學に竟る。諸生は縱觀し、長老は嘆息す。[36]（王莽伝上）

太学の長老や諸生に、王莽の儒学尊崇、孝悌の精神と財力を印象づけただろう。

綏和元年、大司馬となって以降も「賢良」をひきつける努力をしていた。

莽既に同列を拔き出で、四父を繼いで輔政するや、名譽を前人に過ぎしめんと欲し、遂に克己して倦まず、諸の賢良を聘して以て掾史と爲し、賞賜の邑錢は悉く以て士に享し、愈いよ儉約を爲す。[37]（王莽伝上）

自己のふるまいをただし、属吏の任用においても、私財を投じても「賢良」「士」を尊重することにつとめた。平帝期に王莽の地位が上昇するにつれて、高秩の属吏が設置されてゆく。[38] このようなポストも出世をめざす諸生にとっては魅力あるものであろう。

王莽は元始四年に礼制施設建設の一環として学校関連施設を整備した。

〔元始四年〕是の歲、莽奏して明堂・辟雍・靈臺を起こし、學者の爲に舍萬區を築き、市・常滿倉を作り、制度甚だ盛んなり。[39]（王莽伝上）

「舍」「市」「常滿倉」など学生たちの生活環境をととのえたことが特筆されている。[40]

『漢書』儒林伝によれば、王莽は太学制度の拡充をおこなっている。

平帝の時王莽政を秉り、增して元士の子は業を受くを得ること弟子の如く、以て員と爲す勿し。歲課の甲科四十人は郎中と爲し、乙科二十人は太子舍人と爲し、丙科四十人は文學掌故に補す。[41]（儒林伝）

これによれば、太学での受業資格を緩和し、修業後の任官ポストを増やした。同じ頃おこなわれた地方学校制度は、諸生の任官問題と関連する可能性がある。

〔元始三年〕官稷及び學官を立てる。郡國は學と曰い、縣・道・邑・侯國は校と曰う。校・學は經師一人を置く。鄉は庠と曰い、聚は序と曰う。序・庠は孝經師一人を置く。[42]（平帝紀）

全国の郡国・県道・郷聚に教育施設を設置し、それぞれに「経師」「孝経師」を置くという。全郡国・県道・郷聚に各一人を配置するならば、経師らは膨大な人数となる。[43] 儒教経典に通じた人材を数千人規模で供給するには、太学等の諸生がもっともふさわしい。任官のあてのない諸生たちに、修業後のポストを提供することができる。東晋次はこの制度が「ただちに全国的に完全実施されたとは断言できない」[44]という。実施は先送りされるなり、計画だけにおわった可能性は高い。それでも王莽政権がこの制度を掲げたことが、諸生や諸生をめざす若者たちにあたえた影響は少なくないだろう。

以上のように、王莽は成帝期以来、個人的にも、政策面においても、諸生を尊重する姿勢を取り続けていた。それゆえ諸生は王莽をパトロン的な人物として期待をよせていたであろうし、王莽を支持する「民衆運動」に参加したのはもっともである。

たとえば元始四年の太学整備は、④の明堂・辟雍建設工事と関連する。執政者王莽が諸生の学問生活環境を整備する政策を推進したのであれば、諸生が王莽の指示を積極的に受け入れて土木工事に参加したのも頷ける。

王莽は諸生を政治活動に利用していた。王莽が諸生に行動させた例はほかに三例見いだすことができる。

⑦〔元始五年〕孔光の葬送

王莽の協力者であった太師孔光の葬儀のことである。

莽は太后に白すらく、九卿をして策贈せしむるに太師博山侯の印綬を以てし、乘輿の祕器・金錢雜帛を賜う……。載するに乘輿の轀輬及び副各おの一乘を以てし、羽林孤兒・諸生合わせて四百人送を輓き、車萬餘兩、道路皆

な音を擧げ以て喪を過す。[45]（『漢書』孔光伝）

孔光の霊柩は羽林孤児と諸生におくられた。孔子の末裔で博士の経歴をもつ孔光を諸生がおくるのはふさわしいが、王莽が葬礼を定めるのに関与している。

⑧〔元始五年〕傅・丁氏の陵墓発掘

王莽は哀帝期に哀帝の祖母傅太后（孝元傅昭儀）、生母丁姫の勢力と対立しており、元始五年に二人の「陵」を発掘し、璽綬や玉衣を剥奪する。この作業に多くの人が参加した。

公卿の在位するは皆な莽の指に阿り、錢帛を入れ、子弟及び諸生・四夷を遣し、凡そ十餘萬人、作具を操持し、將作を助け共王母・丁姫の故冢を掘平し、二旬の閒皆な平ぐ。[46]（『漢書』外戚伝下・定陶丁姫）

王莽の「指」により、公卿はこの活動を支援した。諸生も王莽に「阿」るため参加したのであろう。計十数万人が土木作業にくわわった。

⑨〔始建国三年〕龔勝徴召

王莽が名儒龔勝を徴さんとして拒絶された一件[47]に諸生は参加した。

莽は復た使者を遣り璽書を奉じ、太子師友祭酒の印綬、安車駟馬もて勝を迎え、卽ち拜して、秩は上卿、先に六月の祿直を賜いて以て装を辨ぜしむ。使者は郡太守・縣長吏・三老官屬・行義・諸生千人以上と勝の里に入りて詔を致さんとす。[48]（『漢書』龔勝伝）

郡県長吏に三老・少吏・「行義」・「諸生」[49]、計一、〇〇〇人以上の行列をひきつれて、使者は龔勝のすむ里におもむ

き、王莽の詔をつたえた。龔勝は楚国（和楽郡）の人であり、この諸生は地方郡国学の学生であろう。天子王莽による賢人礼遇をパレードに仕立て、地元の諸生を参加させた。

⑦⑨は名儒と関わり「諸生」にふさわしい。⑧は政争を背景とするが、儒家的秩序を現実にするという名目がある。いずれも王莽が企画した礼教的行事であるといえよう。前節の②④⑤⑥の「民衆運動」とおなじく、諸生の集団が参加し、王莽の「徳」や儒教的精神を賛美・演出し、王莽がいかに支持を得ているかを世に示している。

このように王莽は政治戦略上重要な場面に多くの諸生を参加させていた。すべての諸生が王莽に心から賛同して行動したとは考えがたいが、王莽が強制した訳ではないだろう。諸生たちは「抜擢」を期待し、「附順」をアピールするため、「民衆運動」に参加する。

諸生たちにとって、王莽はパトロン的存在であり、好ましい政策を推進する。それゆえ王莽の地位が上昇し、指導力を発揮することは諸生の利益につながる。王莽は諸生を政治的に利用したが、諸生も王莽を利用したといってよいのではないか。諸生たちは王莽政権を支える一員なのである。

三　諸生の背景

前節では「民衆運動」の参加者のなかでも、諸生に注目して、かれらが王莽と利害をともにしていたことをみた。では、なぜ諸生なのだろうか。前漢末期の約六千万人の編戸斉民のなかには、さまざまな立場におかれ、独自の利害をもつ人々が存在したはずである。そのなかから、ほかでもなく諸生という立場の人々が、目立って王莽という

政治的指導者とむすびつき、両者にとって好ましい政策を推進した。ここには王莽個人の思想的志向にとどまらない、前漢末期の状況と王莽政権の歴史的意義が反映されているのではないか。

『後漢書』に登場する人物のなかには、諸生としての経歴をもつものがすくなくない。なかでも後漢王朝創業期に活躍した人物には、王莽と同時代（前漢成帝期から新王朝期にかけて）に「受業」「遊学」などして長安に学んでいるものがみられる。

表「王莽期の諸生」はこのような経歴を持つ人物を『後漢書』『漢書』から抽出して整理したものである。数万人いたはずの諸生のうち、わずか二七名にすぎず、統計的な意味をもつわけではないが、傾向の一端をうかがうことはできよう。かれらは王莽賛美に奔走した同学とともに、長安で学生生活を送っていた。

表の諸生の出身地は、おおむね全国各地にひろがる。『後漢書』は光武帝の同郷者の情報が多く、表の諸生も南陽郡出身者が多いが、それでも北は太原・鉅鹿、南は南郡・会稽、西は広漢出身者がみえる。王莽政権は中央・関中偏重の性質をもつが[50]、諸生に関しては全国的なひろがりをもつようである。

出自階層をみておこう。

豪族の子弟であることが示唆されるものに(5)鄧禹、(8)耿純、(14)張堪、(15)陰識がある。また漢の宗室（(3)劉縯(1)劉秀兄弟、(4)劉嘉、(11)劉隆）やその姻族（(8)耿純、(9)朱祐）があり、彼らも郷里社会で影響力をもつ、有力な家の出身者であろう。

高級官僚の子弟としては、(8)耿純、(12)伏湛、(13)郭丹、(27)班彪がある。かれらは二千石クラスの地方官経験者を父

にもつ。官職は不明だが、⑰朱岑も「家は世よ衣冠」とされる。

王莽の学制改革では定員外に「元士之子」を太学に受け入れた（前節引用『漢書』儒林伝）。後の始建国元〔後九〕年の「六百石は元士と曰う」[51]（王莽伝中）を援用することが許されるならば、「元士之子」とは中央官府の令丞や県令（六百石～千石）などの子弟を指す。「任子令」の規定では「任」によって子弟を郎官とすることができるのは二千石以上である。[52]「任子令」の規定からは排除される層の官僚の子弟を、王莽は諸生として太学に受け入れたと考えられる。

たとえば劉秀の兄、(3)劉縯をみてみよう。劉縯自身の伝には学歴や学問との関わりをしめす記事はみられない。しかし同族の(4)劉嘉は「伯升（劉縯の字）と倶に長安に學ん」だ。父南頓令劉欽は劉秀が九歳の時に没しているので、[53]劉欽の死は元始三〔後三〕年にあたる。王莽が学制改革に積極的であったころである。県令の子である劉縯は、王莽の制度改革によって「員」外に太学で学ぶ資格をえる。実際に劉縯が学んだのが太学か私学かは不明であるが、彼らのような中堅クラスの官僚子弟に太学は開放された。

表中の諸生には⑯桓栄、㉓逢萌ら、苦学したものもいる。[54]また『後漢書』の性質の影響もあるであろう。しかし官僚や豪族の子弟は、諸生となるのに比較的有利な立場にあったと考えられる。

では諸生たちは一様に高位任官を目指していたのだろうか。太学は官吏養成機関でありながら、官僚として活躍した人物のうち、太学出身者が多くないことはすでに指摘されている。[55]平帝期のポスト拡大政策をへても、修学者に高官への道が開かれたわけではないことが表の諸生たちの経歴から推測できる。

修学後、長吏としての官歴が明記されるのは(8)耿純、(10)景丹、(12)伏湛である。景丹は不明だが、耿純と伏湛は二千石クラスの高官の子であり、学歴以外で有利な条件をもつ。(26)哀章は符命により新王朝高官の地位をえた。(6)秦豊は長安で「律令」を学んだが、帰郷して県吏となった。(7)王覇は獄吏の職に甘んぜず、長安で学び、儒家の教養を身につけたが、出世にむすびついた様子はない。かたよりや隠蔽の可能性はあるが、[56]学歴だけで「祿利之路」（『漢書』儒林伝賛）がひらけるわけではない。

(5)鄧禹は、豪族の子弟で、若くして学問に才能を発揮していたようであるが、任官することなく帰郷する。晩年、光武帝に王朝創設に関わらなければ、どのような地位についたとおもうか、とたずねられ、鄧禹は答えた。「臣少くして嘗て學問す。郡文學博士たる可し」。光武帝はそれに対して「何ぞ言の謙なるや。卿は鄧氏の子にして、志行脩整なり。何すれぞ掾・功曹ならざる」といっている。[57]地方豪族の子弟は京師で学問を修めたところで、出世の上限は地方属吏の上層であって、中央官界での栄達は容易ではない。「經術苟しくも明かならば、其の青紫を取るは俛きて地の芥を拾うが如きのみ」[58]（『漢書』夏侯勝伝）というのは、少なくとも光武帝の同世代にとって現実的な将来像ではない。

ならば諸生たちは何のために長安に学んだのだろう。また王莽は官吏候補者があり余っているのにもかかわらず、なにゆえより多くのものに太学での修学機会を開放したのであろうか。

後の光武帝、(1)劉秀は王莽新王朝時代に長安で諸生として過ごしている。劉秀は長安で学問を修めていたが、同時に社会勉強をしていたという印象をうける。尚書を学びながらも、学生仲間と事業をおこし学費を稼ぐ。あるい

は「南陽の大人」の長安での便宜をはかる。または政治への見識によって「同舎」から一目おかれる。若者時代の一時期を諸生として京師で過ごすことで、郷里では得がたい経験をしたようである。

郷里を離れた若者たちはともに学ぶなかで、人脈を形成するだろう。劉秀と京師諸生時代に交際したとされる人物に(2)潁川彊華、(5)南陽新野鄧禹、(9)南陽宛朱祐、(17)南陽宛朱岑、(22)汝南高獲、(25)会稽厳光がある。同郡異県出身者と長安で交際したことが注目される。このような人脈が後年の劉秀にとって重要な意味をなしたことは知られているが、[59] 平時でも郡内を中心に人脈を形成することは、豪族らの子弟にとって有意義なことであると考えられる。

劉秀や鄧禹の遊学は、京師で学ぶこと自体が目的なのではないか。中央官界での立身出世を目標に官吏候補者として修学するというよりも、都会で社会勉強をして、教養をまなび、いわば箔をつける。または人脈をつくるといったことを目的とする。官吏養成機関で学ぶことは名目にすぎず、むしろ郷里で認められるために必要な社会勉強であるように考えられる。

では王莽政権にとって、諸生として地方の有力者の子弟を太学にあつめる意義はなにか。

太学ですら定員外の学生を受け入れ、学力による選別をおこなわないならば、名ばかりの学生・官吏候補者があらわれることもある。(18)任延のように若くして学才を謳われた人物はいるし、儒林伝に立伝された人物などは学究生活をおくっていたのであろうが、任官からは距離を置くものも少なくない。(3)劉縯は任侠めいた人物であるし、(26)哀章などは「素より行なく、好みて大言を爲」した。諸生はどこまで官吏候補といってよいのか。雑多な人材を含んでいるようである。

むしろ有力な家の若者を一定期間、首都にあつめ、政府機関の影響下にいれること自体、政治的な意義をもつのではないか。諸生のすべてが中央の官僚として有為の人材である必要はないし、ポストをあたえるのは不可能である。地方出身者を首都にとどめ置いて中央の威光を見聞させ[60]、ときには国家的儀礼行事に参加させること、またその様を内外に知らしめること自体[61]、中央の影響力を地方へ伝える契機である。

「元士之子」を太学に受け入れることで、官僚の子弟は首都にとどまることになる。任子制が高官の子弟を郎官として宮中に置いたのに対して、太学はそれに次ぐランクの官僚の子弟を京師に置く。この点で諸生とは任子郎官の外延に位置づけることができる。豪族の子弟が修学を名目として京師で諸生となることもこれに類する。これは学制改革、学校整備の目的の一つとなるのではないだろうか。

全国各地からきた諸生により、王莽は京師にいながら、己を支持し、己の威光を知るものを全国的に獲得したのである。

このような政策が前漢末期に王莽政権によってとられたことは何を意味するのだろうか。豪族や中堅官僚を輩出する層と中央との関係が問題になるのではないか。

たとえば二千石クラスまで上り詰めた官僚ならば任子制により、列侯ならば世襲により、次世代も安定して中央と結びつくことができよう。しかしそれからは排除される層は中央と関係を持つ機会は限定されている。察挙制度により中央官界進出をはたすものもあるが数は限られる。それに対して、諸生となる機会はひろく開放されている。つまり前時代までは、中央との関係を安定的に再生産することが困難であった層に対して、王莽は京師諸生という

機会を開放した。その諸生の支持を組織・演出し「民衆運動」を展開することで、王莽は中央政界に強い指導力を発揮することに成功した。

王莽と諸生の結合は儒家という思想的志向の共通性によるものであることは否定できない。しかし、本節ではより世俗的な問題として理解することを試みた。

豪族など地方の有力な家々の存在を背景に、王莽は子弟を通して彼らの支持を取り付けようと、意図して諸生に恩恵をばらまいたのであろうか。あるいは思想的志向の共通により諸生たちとむすびついた王莽こそが、前漢末期に彼らの支持を背景に、強力な指導力を発揮したとみるべきであろうか。いずれにせよ、王莽政権の成長の背景には諸生と彼らの家々が存在し、彼らの支持をとりつけた王莽が指導力を発揮したということはできよう。

むすび

平帝期には王莽賛美の「民衆運動」がさかんに展開された。これは王莽側にしくまれたパフォーマンスにすぎないが、王莽の政策を評価し、王莽が指導力を発揮することを期待するものがすくなからず存在したことを反映する。では王莽支持者は具体的にはどのような立場の人々で、王莽政権の何に期待したのであろうか。王莽支持者のうち諸生については比較的くわしく知ることができる。

このころ長安の諸生には政治活動に積極的な風潮が生じていた。王莽は意図的に諸生に恩恵を施し、諸生のパトロン的人物となっていた。このような風潮を背景に、王莽は儒家的秩序を表現する行事に諸生を参加させて、儒家

的精神を演出するのに利用した。王莽が指導力を発揮することは諸生にとって好ましいことであり、諸生は「民衆運動」への参加をとおして、王莽政権の一翼を担っていた。

ではこのような関係をむすんだのは、なぜ王莽と諸生なのであろうか。前漢末から王莽新王朝時期にかけて諸生となった人物を検討した。諸生の中には、豪族や官僚の子弟をふくむ。彼らは官吏候補者という名目で京師に学ぶが、高官への道は狭き門である。諸生にとって京師遊学は社会勉強や人脈形成の場であった。王莽政権にとっては、諸生に中央の威光を経験させ、儀礼行事に参加させること自体、中央の影響力を地方に伝えるという点で政治的意味をもつ。中央と地方有力者は、諸生を通じ安定して関係を構築する。このような政策を歓迎する諸生や有力な家々は王莽政権を支持したと考えられる。

ところで現存する史料をみるかぎり「民衆運動」は平帝期に集中してみられ、居摂・新王朝期には地方でのもの（始建国三年⑨）、末期段階のもの（地皇四年⑥）のみである。王莽は「民衆運動」を演出して、指導力をたかめる政策から手を引いたかのようである。

興味深いことに、「民衆運動」が見られなくなる居摂以降、王莽政権は大規模な軍事活動を遂行するようになる。軍事活動を意図的に大規模化することで、参加者に官位や軍功褒賞獲得の機会を広くあたえたと考えられる。大規模軍事活動と「民衆運動」は、王莽が事業を企画・演出し、みかえりと引き換えに人々に参加させ、それによって王莽の指導力・求心力を高めたという構造をもつ点で共通する。(62)

王莽は礼教であれ、軍事であれ、国家的な事業を企画演出し、それに人々を巻き込んだ。班固は「莽性躁擾にし

て、爲すなき能わず、毎に興造する所有るに、必ず古に依りて經文を得んと欲す」[63]（『漢書』食貨志下）という。そのような政治家を前漢末期の人々は支持したのである。

前漢後期には繇役削減[64]や軍事活動の縮小により、中央の指揮・編制機能が発揮されることが少なくなっていたと考えられる。王莽が支持を集めた背景には、この機能の再強化が要求されていたとみることも可能なのではないだろうか。

註

（1）保科季子「近年の漢代『儒教の国教化』論争について」『歴史評論』六九九　二〇〇八。目黒杏子「漢代国家祭祀制度研究の現状と課題――皇帝権力と宇宙論の視点から」『中国史学』一五　二〇〇五。

（2）河地重造「王莽政権の出現」『岩波講座　世界歴史四』岩波書店　一九七〇　三八一頁。また渡辺信一郎「漢代の財政と帝国編成」『中国古代の財政と国家』汲古書院　二〇一〇　は「経書の記述によって、あまりにも杓子定規に現実を改変し、またしばしば短時日のうちに変更をおこなった」（一八五頁）とする。

（3）胡適「王莽――一千九百年前的一個社会主義者」一九二二→『胡適文集三』北京大学出版社　一九九八。渡邉義浩『王莽――改革者の孤独』大修館書店　二〇一二。

（4）拙稿「王莽の戦争」第七回中国中古史青年学者国際会議（二〇一三年八月二四日、中央大学）にて報告。

（5）宮川尚志「禅譲による王朝革命の研究」『六朝史研究政治社会篇』日本学術振興会　一九五六。

（6）莽因上書、願出錢百萬、獻田三十頃、付大司農助給貧民。於是公卿皆慕效焉。

（7）郡國大旱、蝗、青州尤甚、民流亡。安漢公・四輔・三公・卿大夫・吏民爲百姓困乏獻其田宅者二百三十人、以口賦貧民。

（8）陳崇「稱莽功德」奏にも「又上書歸孝哀皇帝所益封邑、入錢獻田、殫盡舊業、爲衆倡始。於是小大鄉和、承風從化、外則王公列侯、内則帷幄侍御、翕然同時、各竭所有、或入

金錢、或獻田畝、以振貧窮、收贍不足者」（王莽伝上）とある。

（9）皇后冊立は元始三年春であるが、「皇帝卽位三年、長秋宮未建、液廷媵未充」（王莽伝上）とあり、議論がはじまったのは前年の元始二年であると考えられる。

（10）事下有司、上衆女名、王氏女多在選中者。莽恐其與己女爭。（王莽伝上）

（11）王氏女、朕之外家。其勿采。

（12）庶民・諸生・郎吏以上守闕上書者日千餘人、公卿大夫或詣廷中、或伏省戶下、咸言「明詔聖德巍巍如彼、安漢公盛勲堂堂若此。今當立后、獨奈何廢公女。天下安所歸命。願得公女爲天下母」。莽遣長史以下分部曉止公卿及諸生、而上書者愈甚。

（13）陳崇時爲大司徒司直、與張敞孫竦相善。竦者博通士、爲崇草奏、稱莽功德、崇奏之。……太后以視群公、群公方議其事、會呂寬事起。（王莽伝上）

（14）及民上書者八千餘人、咸曰「伊尹爲阿衡、周公爲太宰、周公享七子之封、有過上公之賞。宜如陳崇言」。

（15）公以八月戴生魄庚子奉使朝、用書臨賦營築、越若翊辛丑、諸生・庶民大和會、十萬衆竝集、平作二旬、大功畢成。

（16）是時、吏民以莽不受新野田而上書者、前後四十八萬七千五百七十二人。及諸侯王・公・列侯・宗室見者、皆叩頭言宜亟加賞於安漢公。

（17）是以諸侯王・公・列侯・宗室・諸生・吏民翕然同辭、連守闕庭。

（18）因搏心大哭、気盡、伏而叩頭。又作告天策、自陳功勞千餘言。諸生・小民會旦夕哭、爲設飧粥、甚悲哀及能誦策文者除以爲郎、至五千餘人。

（19）莽色厲而言方、欲有所爲、微見風采。黨與承其指意而顯奏之、莽稽首涕泣、固推讓焉、上以惑太后、下用示信於衆庶。

（20）東晋次『王莽――儒家の理想に憑かれた男』白帝社二〇〇四　一三四頁。

（21）及其居位輔政、成・哀之際、勤勞國家、直道而行、動見稱述。

（22）〔哀帝期〕是時、王莽爲大司馬、乞骸骨、避帝外家。上既聽莽退、衆庶歸望於（傅）喜。（『漢書』傅喜伝）

（23）後二歲〔建平二年〕、傅太后・帝母丁姬皆稱尊號。有司奏「新都侯（王）莽前爲大司馬、貶抑尊號之議、虧損孝道、及平阿侯仁臧匿趙昭儀親屬、皆就國」。天下多冤王氏。（『漢書』元后伝）

（24）「元壽元年、日蝕。賢良對策多訟新都侯莽者、上於是

徵莽及平阿侯仁還京師侍太后」（元后伝）。「元壽元年、日食、賢良周護・宋崇等對策深頌莽功德、上於是徵莽」。（王莽伝上）

（25）莽故大司馬、辭位辟丁・傅、衆庶稱以爲賢、又太后近親、自大司徒孔光以下擧朝皆擧莽。（『漢書』何武伝）

（26）附順者拔擢、忤恨者誅滅。

（27）上尊宗廟、增加禮樂、下惠士民鰥寡、恩澤之政無所不施。

（28）莽既說衆庶、又欲專斷。

（29）東晋次「儒学の普及と知識階層の形成」一九八四↓『後漢時代の政治と社会』名古屋大学出版会　一九九五一四七・一四八頁。

（30）太学の重要性については保科季子「図讖・太学・経典――漢代『儒教国教化』論争に対する新たな視座」『中国史学』一六　二〇〇六　に指摘がある。

（31）近い時期の私学の例として、居摂二年に高陵侯翟宣が長安の自宅で「教授諸生」している（『漢書』翟方進伝）。

（32）西川利文「漢代博士弟子制度の展開」『鷹陵史学』一七　一九九一　二三頁。

（33）（元寿元年：丞相）三月丙午、丞相（王）嘉下獄死。七月丙午、御史大夫孔光爲丞相。（『漢書』百官公卿表下）

（34）宣坐距閉使者、亡人臣禮、大不敬不道、下廷尉獄。博士弟子濟南王咸擧幡太學下、曰「欲救鮑司隸者會此下」。諸生會者千餘人。朝日、遮丞相孔光自言、丞相車不得行、又守闕上書。上遂抵宣罪減死一等、髡鉗。

（35）吉川忠夫「党錮と学問――とくに何休の場合」一九七六↓『六朝精神史研究』同朋舎　一九八四。

（36）有子光、莽使學博士門下。莽休沐出、振車騎、奉羊酒、勞遣其師、恩施下竟同學。諸生縱觀、長老嘆息。

（37）莽既拔出同列、繼四父而輔政、欲令名譽過前人、遂克己不倦、聘諸賢良以爲掾史、賞賜邑錢悉以享士、愈爲儉約。

（38）「（元始四年）宰衡掾史秩六百石」、「（五年）署宗官・祝官・卜官・史官、虎賁三百人、家令丞各一人、宗・祝・卜・史官皆置嗇夫、佐安漢公」。（王莽伝上）

（39）是歲、莽奏起明堂・辟雍・靈臺、爲學者築舍萬區、作市・常滿倉、制度甚盛。

（40）『三輔黄図』にも「王莽作宰衡時、建弟子舍萬區、起市郭上林苑中」とあり、『太平御覽』巻534所引『三輔黄図』佚文に「王莽爲宰衡、起靈臺作長門宮、南去堤三百歩。起國學於郭内之西南、爲博士之宮寺門、北出王於其中央爲射宮門、西出殿堂南嚮爲牆、選士肆射於北中。比之外爲博士舍三十區周環之。此之東爲常滿倉之北爲會市。但列槐樹數

百行爲隧無牆屋。諸生朔望會此市、各持其郡所出貨物及經書傳記笙磬樂、相與賣買。邕邕揖讓或論議槐下。其東爲太學宮寺門南出、置令丞吏詰姦究理辭訟。五博士領弟子員三百六十、六經三十博士、弟子萬八百人。主事高弟侍講各二十四人、學士司舍行無遠近皆隨檐、雨不塗足暑不暴首」とある。

(41) 平帝時王莽秉政、增元士之子得受業如弟子、勿以爲員。歲課甲科四十人爲郎中、乙科二十人爲太子舍人、丙科四十人補文學掌故云。

(42) 立官稷及學官。郡國曰學、縣・道・邑・侯國曰校。校・學置經師一人。鄉曰庠、聚曰序。序・庠置孝經師一人。

(43) 「凡縣道國邑千五百八十七、鄉六千六百二十二、亭二萬九千六百三十五」(『漢書』百官公卿表上)、「凡郡國一百三、縣邑千三百一十四、道三十二、侯國二百四十一」。(同地理志)

(44) 東晋次「儒学の普及と知識階層の形成」一五三頁。

(45) 莽白太后、使九卿策贈以太師博山侯印綬、賜乘輿祕器・金錢雜帛……。載以乘輿輜軿及副各一乘、羽林孤兒・諸生合四百人輓送、車萬餘兩、道路皆擧音以過喪。

(46) 公卿在位皆阿莽指、入錢帛、遣子弟及諸生・四夷、凡十餘萬人、操持作具、助將作掘平共王母・丁姫故冢、二旬閒皆平。

(47) 〔始建国三年〕遣謁者持安車印綬、卽拜楚國龔勝爲太子師友祭酒、勝不應徵、不食而死。(王莽伝中)

(48) 莽復遣使者奉璽書、太子師友祭酒印綬、安車駟馬迎勝、卽拜、秩上卿、先賜六月祿直以辨裝。使者與郡太守・縣長吏・三老官屬・行義・諸生千人以上入勝里致詔。

(49) 顔師古の注に「行義謂鄉邑有行義之人也。諸生謂學徒也」とある。

(50) 大櫛敦弘「新朝の統一支配——主として軍事的側面から——」『高知大学　人文科学研究』一六　二〇一〇。拙稿「王莽の戦争」。

(51) 六百石曰元士。

(52) 『漢書』哀帝紀注「應劭曰、任子令者、漢儀注吏二千石以上視事滿三年、得任同産若子一人爲郎。」

(53) 光武年九歲而孤。(『後漢書』光武帝紀)

(54) 東晋次「儒学の普及と知識階層の形成」

(55) 西川利文「漢代博士弟子制度の展開」

(56) 班氏は王莽政権との関わりを隠蔽していることが疑われる(稲葉一郎「『漢書』の成立」一九八九→『中国史学史の研究』京都大学学術出版会　二〇〇六)。また崔篆は王莽の大司空崔発の弟であり、後漢時代には「自以宗門受

莽僞寵、慙愧漢朝、遂辭歸不仕」。（『後漢書』崔駰列伝）

（57）帝後與功臣諸侯讌語、從容言曰「諸卿不遭際會、自度爵祿何所至乎」。高密侯鄧禹先對曰「臣少嘗學問。可郡文學博士」。帝曰「何言之謙乎。卿鄧氏子、志行脩整。何爲不掾・功曹」。（『後漢書』馬武列伝）

（58）經術苟明、其取青紫如俛拾地芥耳。

（59）藤川和俊「後漢王朝成立前夜――初期劉秀軍団の性格について――」『日本秦漢史学会会報』一〇　二〇一〇。

（60）光武帝の青年期のエピソード「後至長安、見執金吾車騎甚盛、因歎曰『仕宦當作執金吾、娶妻當得陰麗華』」（『後漢書』皇后紀・光烈陰皇后）は有名である。中央近衛部隊のきらびやかなありさまに、地方出身の若者はあこがれをいだく。

（61）福原啓郎「晋辟雍碑に関する考察」（一九九八→『魏晋政治社会史研究』京都大学学術出版会　二〇一二）は立碑の歴史的意義を考察する。学生を儀礼に参加させるという点で王莽の政策と共通する側面がある。

（62）拙稿「王莽の戦争」。後八年の漢新禅譲革命において「民衆運動」による演出はなされていないようである。礼教を主題とする「民衆運動」は王莽の執政者としての地位を高めることはできても、王朝交替を正当化、推進することはなかったようである。そのため元始年間の礼教・諸生による「民衆運動」の延長線上に、居摂以降の大規模軍事活動・褒賞濫発政策は位置するが、より強力なインパクトをもつ政策であったと考えられる。

（63）莽性躁擾、不能無爲、毎有所興造、必欲依古得經文。

（64）拙稿「前漢後半期における郡県民支配の変化――内郡・辺郡の分化から――」『東洋学報』八六―三　二〇〇四。

（岐阜聖徳学園大学等非常勤講師）

表「王莽期の諸生」

	姓名	出身	出自	父の官職	時期	史料	巻数	注
1	劉秀	南陽蔡陽	宗室	南頓令	天鳳	王莽天鳳中、乃之長安、受尚書、略通大義。	『後漢書』巻1	
						受尚書於中大夫盧江許子威。資用乏、與同舍生韓子合錢買驢、令從者僦、以給諸公費。	同巻1注『東観記』	
						上在長安時、嘗與（朱）祐共買密合藥。	同巻22注『東観記』	
						年九歳而南頓君卒、隨其叔父在蕭、入小學、後之長安、受尚書經師事廬江許子威。大義略擧、因學世事。朝政每下、必先聞知、具爲同舍解説。南陽大人往來長安、爲之邸、閣稽疑議。	『太平御覧』巻90所引『東観漢記』	
2	彊華	潁川			（天鳳）	光武先在長安時同舍生彊華自關中奉赤伏符。	『後漢書』巻1	
3	劉縯	南陽蔡陽	宗室	南頓令	?	（劉嘉）少孤、性仁厚、南頓君養視如子、後與伯升俱學長安、習尚書・春秋。	『後漢書』巻14	
4	劉嘉	南陽蔡陽	宗室		?	少孤、性仁厚、南頓君養視如子、後與伯升俱學長安、習尚書・春秋。	『後漢書』巻14	＊巻22馬武伝「卿鄧氏子、志行脩整、何爲不掾功曹」
5	鄧禹	南陽新野	豪族＊		（天鳳）	年十三、能誦詩、受業長安。時光武亦游學京師、禹年雖幼、而見光武知非常人、遂相親附。數年歸家。	『後漢書』巻16	
6	秦豐	南郡邔			?	豐、邔縣人、少學長安、受律令、歸爲縣吏。	『後漢書』巻17注『東観記』	
7	王覇	潁川潁陽		郡決曹掾	?	世好文法、父爲郡決曹掾、覇亦少爲獄吏。常慷慨不樂吏職、其父奇之、遣西學長安。	『後漢書』巻20	

8	耿純	鉅鹿 宋子	豪族＊・宗室姻族＊＊	濟平尹	?	純學於長安、因除爲納言士。	『後漢書』巻21	＊本伝「其鉅鹿大姓、＊＊本伝「眞定宗室之出」
9	朱祐	南陽 宛	宗室姻族＊		（天鳳）	祐初學長安、帝往候之、祐不時相勞苦、而先升講舍。上在長安時、嘗與（朱）祐共買密合藥。	『後漢書』巻22 同巻22注『東観記』	＊本伝「外家復陽劉氏」
10	景丹	馮翊 櫟陽			?	少學長安。王莽時擧四科、丹以言語爲固德侯相、有幹事稱、遷朔調連率副貳。	『後漢書』巻22	
11	劉隆	南陽 安衆	宗室		（地皇）＊	及壯、學於長安、更始拜爲騎都尉。	『後漢書』巻22	＊本伝「王莽居攝中……隆以年未七歳、故得免。」
12	伏湛	琅邪 東武	名儒	高密太傅	成帝	成帝時、以父任爲博士弟子。五遷、至王莽時爲繡衣執法、使督大姦、遷後隊屬正。	『後漢書』巻26	
13	郭丹	南陽 穰		廬江太守	（～天鳳六年）＊	後從師長安、買符入函谷關、……既至京師、常爲都講、諸儒咸敬重之。大司馬嚴尤請丹、辭病不就。王莽又徵之、遂與諸生逃於北地。	『後漢書』巻27	＊王莽伝中天鳳三年「武建伯嚴尤爲大司馬」。天鳳六年「乃策尤曰『……其上大司馬武建伯印韍…』」。
14	張堪	南陽 宛	豪族＊		?	年十六、受業長安、志美行厲、諸儒號曰「聖童」。	『後漢書』巻31	＊本伝「爲郡族姓」
15	陰識	南陽 新野	豪族＊		地皇	及劉伯升起義兵、識時游學長安、聞之、委業而歸、率子弟・宗族・賓客千餘人往詣伯升。	『後漢書』巻32	＊本伝「率子弟・宗族・賓客千餘人」
16	桓榮	沛郡 龍元	「貧窶無資」		～居摂	少學長安、習歐陽尚書、事博士九江朱普。貧窶無資。……至王莽簒位乃歸。	『後漢書』巻37	

17	朱岑	南陽宛	「家世衣冠」		(天鳳)	初、光武與暉父岑俱學長安、有舊故。	『後漢書』卷43						
18	任延	南陽宛			(地皇)＊	年十二、爲諸生、學於長安、明詩・易・春秋、顯名太學、學中號爲「任聖童」。値倉卒、避兵之隴西。	『後漢書』卷76	＊本伝「時隗囂已拠四郡」					
19	尹敏	南陽堵陽			?	少爲諸生。初習歐陽尚書、後受古文、兼善毛詩・穀梁・左氏春秋。	『後漢書』卷79上						
20	孔子建	魯國魯	孔子子孫		?	曾祖父子建、少遊長安、與崔篆友善。及篆仕王莽爲建新大尹、嘗勸子建仕。……遂歸、終於家。	『後漢書』卷79上						
21	包咸	會稽曲阿			?	少爲諸生、受業長安、師事博士右師細君、習魯詩・論語。	『後漢書』卷79下						
22	高獲	汝南新息			(天鳳)	少遊學京師、與光武有舊。師事司徒歐陽歙。	『後漢書』卷82上						
23	逢萌	北海都昌	「家貧」		～元始三年	家貧、給事縣爲亭長。時尉行過亭、萌候迎拜謁、既而擲楯歎曰「大丈夫安能爲人役哉。」遂去之長安學、通春秋經。時王莽殺其子宇、……歸。	『後漢書』卷83						
24	周黨	太原廣武	「家産千金」		～居摂	既而散與宗族、悉免遣奴婢、遂至長安遊學。……及王莽竊位、託疾杜門。	『後漢書』卷83						
25	嚴光	會稽餘姚			(天鳳)	少有高名、與光武同遊學。	『後漢書』卷83						
26	哀章	廣漢梓潼			居摂	學問長安、素無行、好爲大言。	『漢書』卷99上						
27	班彪	京兆長安	外戚	廣平相	?	彪字叔皮、幼與從兄嗣共遊學、家有賜書、内足於財、好古之士自遠方至、父黨揚子雲以下莫不造門。	『漢書』卷100上						
		扶風安陵		廣平太守			『後漢書』卷40上						

（　）内は推定